第　63　号
発　行
小松同窓会本部
〒923-8646
小松市丸内町二ノ丸15
石川県立小松高等学校内
天守台編集委員会
TEL（0761）21-6330

『落ちこぼれ松高生の回想と衆人皆師の薦め』

前石川県副知事
石川県産業創出支援機構理事長
田中　新太郎（高27回）

私は、3人の兄姉に続いて昭和47年に小松高校に入学した。大学進学に夢と希望を抱いて勉学と部活動の両立に頑張る日々を過ごし、学業成績も上位を維持していたが、2年生になる頃にはもう息切れし、日々息苦しさや閉塞感を感じるようになった。そんな中で迎えた2年生の夏休み、クラスメートとのキャンプや中学時代の仲間との夜遊びなどを経験したことで、2学期が始まっても元の生活に戻ることができなくなった。さらに心配してくれた担任の忠告も聞かず、部活動も新人戦後に退部し、現実逃避の日々に浸かったままで大学受験の時期を迎えた。そして、大学ならどこでも良いと言う安易な選択をして進学した。ただ、自由な校風や良き友に恵まれ、高校生活はとても楽しかった。

大学に入学してからも、1年間はバイトもせず、漠然とキャンパスライフを楽しむ日々を過ごしていたが、2年生になって下宿の仲間に誘われて山岳部に入部した。彼は山口県出身の一浪生で、浪人時代の自堕落な生活への反省から大学生の間に何か自分を成長させる経験をしたいと常々言っており、登山を通じて実践することにしたから一緒にやってみないかと誘ってくれたのだ。山岳部に入部してからは、登山のノウハウの習得、体力作り、登山用具と旅費を稼ぐためのバイト、そしてアルプス等への登山に精を出す日々が続いたが、学校での勉強と違い楽しくてしようがなかった。また、高山への登山は遭難により生命の危険を伴うことから綿密な計画立案と万全の実行が求められるが、その実践を通じて徐々に自分に自信が持てるようになった。しかし、一度だけ体調が悪くて、下山の途中で遭遇した「崖崩れの恐れあり、回り道せよ」の標識を無視して進もうとして、先述の山口県出身の彼にきつく窘められる醜態をさらしたことがあった。改めて自分の未熟さ、弱さを思い知らされたが、今後の人生にとってこの上ない良い経験をしたと思い直し、その後も積極的に登山を企画・実行した。そして、あっという間に就職先選択の時期を迎えたが、生まれ育った石川県以外で就職する気になれず、また、営業職などノルマがかかる仕事はしたくないと思い、公務員である石川県職員の道を選んで採用試験を受けた。今と違って当時は民間企業が人気で地方公務員は競争率がそんなに高くなく、上手く合格できた。

こうして私の公務員人生がスタートしたわけであるが、土木部の出先機関に配属され、河川改修に伴う立ち退きの用地交渉を担当することになった。定時退社の勤務ではなく、週に数回にわたり晩飯後に地権者の家に出向き、立ち退きをお願いする日々が始まった。2年間は先輩職員の交渉の記録係だったが、その後の3年間は土地や家屋の移転補償費の算定や具体の用地交渉も任され、責任が重くなったが逆にやりがいを感じた。親方日の丸の上から目線の仕事ではなく、先祖代々受け継がれてきた家屋敷を売っていただくようお願いする仕事であり、法令等を遵守しつつ信頼関係を構築しなければ成果が挙がらない難しい仕事だったが、今振り返ってみると、この経験がその後の私の公務員人生における仕事に臨む心構えを作ってくれたと思っている。それは、県民第一、信頼第一、現場第一を基本に捉えて判断・行動することである。加えてもう一つ、高校から大学までの経験を踏まえ、自分の未熟さや弱さをしっかり認識し、その克服に努力するとともに、上司や先輩、同僚など出会った人たちの良いところを学んで、自分もできるよう努力することである。

これまでの40年を超える公務員人生の中で難しい局面が多々あったが、公務員の本分を忘れず、自分の弱さを知り、他人に学んで弱点を克服する努力をしてきたこと、そして、多くの良き人との出会いに恵まれたことにより、何とか乗り切ることができたと思っている。石川県職員の道に進んだ松高の落ちこぼれが、一所懸命に生きる中で会得した生き方、処世術である。

これからも、石川県の発展と県民福祉の向上に少しでも寄与できるよう与えられた立場で仕事に励むとともに、人との新たな出会いや触れ合いを通して、さらに人間として成長できるよう努力していきたいと思っている。ちなみに長く仕えた谷本正憲前石川県知事の座右の銘は「衆人皆師」であるが、身近に至上の師がいたことはこの上ない幸運であった。

小松高校　昭和50年3月卒業

53年ぶりに母校を散策して

―恩師と同級生に感謝―

税理士 高畑　康三（高21回）

『はじめに』

第21回の卒業生として、母校を離れてもう53年になります。現在、私が勤務する税理士法人しんあい三由会計事務所は小松高校と芦城公園を挟んだ２５０メートルの位置にあります。70才過ぎても仕事ができるのは、ひとえに教えていただいた先生方々、支えていただいた友達、小松高校のおかげと感謝しています。卒業した昭和44年は全国の大学で学園紛争が広がり、東大入試中止はじめとした混乱する中での大学受験となった。そんな渦中にいた同級生を思い出しながら、新緑がまぶしい校門から校庭の散策をはじめた。

『入学した頃』

私は昭和41年４月に入学した。亡き母（前身の小松高等女学校の卒業生）よかったねと心から合格を喜んでくれたのがとても嬉しかった。列車通学では同じ根上中学生の女子がきれいな女子高校生に変身していた。ひそかに恋心を抱きながらウキ、ウキしながら登校した。現在、校庭を歩いてみると、建物がきれいになり、すっかり風景が変わってしまっていた。東側の玄関にまわると、当時は自転車置き場があり、その近くに１年の教室があった。担当の関戸信次先生から「１カ月すると、空気は重くなる」と言われ、浮ついた気持ちが消えた。今、また校舎に入れば、あの教室があり、そこにクラス・メイトがいるような気がふとした。

『３人の同級生』

駐輪場を進み、運動場を横切り、桜並木に着いた。すっかり葉桜になっていた。そこは薄暗い緑の並木の長いトンネルになっていて、中を歩くと同級生の姿がふと浮かんで来た。「室谷清志君」３年生のとき、彼は高堂町で、私は根上町から自転車通学をしていて、帰り道が同じ方角だった。「東大に行こうか、東京外大に行こうか、迷っている」と私にアドバイスを求めたと記憶している。彼は現役で東京外大に合格した。社会人の彼と話したかった。「二口治君」については、彼は小舞子駅から、私は旧寺井駅から列車に乗ったので、知り合いになり高校までの通学路で歩きながら、彼とはよく話した。博学の彼の話しにいつも感心させられた。成績はトップクラスで、どんどんと歩く姿は眩しかった。亡くなったと知り、金沢での会合から帰るときは彼を車窓から偲んだ。３人目は「旧姓竹内まみい」さんです。１年のとき、座席が私の後ろで、柔道部でその姿は凛しい感じでした。「結婚するなら、音楽家のような家で仕事をする人が…」と休み時間に女生徒と話す声が聞こえて来たことを記憶している。陶芸家になった彼女とは個展会場で話すことが私の夢だった。彼女が亡くなり夢が実現できなかった。３人に出会えたことが私にとつて人生を生きる上で糧となった。感謝したい。周囲がだんだんと明るくなり、緑の並木道のトンネルを抜けたようだった。目の前に天守台が見えて、交流試合中の野球部員の大きな声援が聞こえた。

『３人の恩師』

天守台の木の階段を上り、恩師を思う。「小西義男校長」「不運にいじけるな　幸運におぼれるな」卒業アルバムの言葉が心の支えとなった。３年の担任の「橋本斉祐先生」には「合格すると思って受験した生徒が浪人するのだ、君は入った大学で上位になればいい」と言われ、私は浪人を断念した。適切なアドバイスをいただいた。英語担任の「矢原珠美子先生」「予習しなさい、復習しなさい」と言われても、その気になれなかった。大学院を目指し、高校の英語の教科書を読み直したときに、先生の言葉を理解することが出来た。３人の恩師に出会えたことが私には幸運だった。

『結びに』

天守台に立つと、晴れ渡った空の向こうに白山連峰が見える。「ああ、われらが　母校、小松高校…」と校歌を口ずさむと、クラス・メイトの顔が浮かび、懐かしさで涙がこぼれそうになった。私は事務所から２５０メートルを歩き、校門から校庭を廻り、53年ぶりに母校の散策を終えることができました。

木場潟から世界へ

東京オリンピックパラリンピック
カヌー競技 スポーツマネージャー
古谷 利彦（高34回）

大学入学を契機に、アウトドアのスポーツをやってみたいという思いから、カヌー（スプリント）競技に出会いました。大学時代の多くの時間を琵琶湖の畔にある合宿所で過ごし、卒業後高校の教員として小松に戻り、平成３年に開催された「石川国体」を目指して、競技の普及、競技力の向上の一翼を担うことになりました。多くの皆様からの温かいご指導、ご支援のおかげで、日本を代表する多くの選手が小松から誕生し、また拠点の木場潟は、国内ナンバーワンの競技場になり、ナショナルトレーニングセンターに認定されています。木場潟がカヌー競技のハイトップの施設になったのは、地理的、環境面の素晴らしい要素とともに、小松の人の力のおかげであると思います。

部活動の指導者としてカヌーに携わりながら、日本代表チームのマネージメントや日本連盟の国際関係の業務に関わり、またアテネオリンピック以来、審判としてオリンピックに参加させてもらいました。そして東京オリパラのカヌー競技を統括するスポーツマネージャーとして大会組織委員会に派遣頂き、その運営に携わることとなりました。

新型コロナウィルスの感染拡大により、未曽有の１年延期となった東京大会では「スポーツの力」を信じ、スポーツを通じ社会をポジティブに変革するために大会の準備が進められました。東京大会は多様性の受容や男女平等の推進、スポーツは様々な価値観を超えて、世界を一つにできることが証明された大会となりました。

大会のムードを創出してくれたのは、ボランティアの皆さんでした。とりわけ、パラリンピックでは、アスリートを温かくサポート、リスペクトしてくださる最高のムードを作ってくれました。今後のパラスポーツにしっかりと希望の光がともり、スポーツを通じて、社会が変革するということが認識された瞬間でありました。

パラカヌー競技では、シリアの内戦で難民となりドイツに移った後、大けがを負い、また家族の死にも直面するという絶望の中でカヌーに出会い、生きる希望を持ち、難民選手団として参加したアナス選手のお世話をしました。想像を絶する苦難の中でスポーツが希望を与えたことにスポーツの力を実感しました。そして彼のゴールに向かってひたむきに漕ぐ姿に多くのスタッフ・ボランティアが勇気と希望をもらいました。

参加した多くのアスリートたちは、１年延期となったTokyo2020で厳しい感染症予防対策に不平・不満を述べるのではなく、最高の舞台で、最高のパフォーマンスを発揮できたと感謝を述べてくれました。また木場潟で合宿した海外チームはのべ10か国にのぼり、13個のメダルを獲得しました。「木場潟での事前キャンプで素晴らしい支援を頂いたことがメダル獲得や好成績につながった。このホスピタリティは一生忘れることはない。」というメッセージは、何よりうれしいものでありました。

アスリート、ボランティア、大会に関わる全ての人々は、忍耐強く、スポーツの力を信じ、大会を取り巻く様々な困難を乗り越えることができました。大会のモットーであるUnited by Emotion（感動を通じてひとつになる）ということがしっかりと実現されたと思います。このことは、日本の社会全体にとって素晴らしいレガシーとなることを確信しています。

私は、現在日本カヌー連盟の専務理事とＪＯＣ（日本オリンピック委員会）の理事を務めながら、昨年11月の国際カヌー連盟の総会で、世界のカヌースプリント競技を統括するカヌースプリント委員長に選任され、パリオリンピックの準備に携わっています。これからも、小松そして木場潟を拠点に、世界のカヌースポーツに新たな風を吹かすことができるように取り組みたいと思っています。今後とも、カヌースポーツへのご指導・ご支援の程、よろしくお願いいたします。

元雄 潤さん（高39回）を偲ぶ会

元雄 潤を偲んで

山中　謙一（高39回）

「潤！」

いつ頃からだろうか、彼と繋がりが出来、そのように呼ぶようになったのは…。

今となっては遠い昔のことになるのではっきりとした記憶はないが、思うにもう40数年前、私たちが小学校に入学した頃に知り合い、その頃に自然とそのように呼び始めた気がする。

小学校から、彼をそう呼び、呼んだ時は、いつも満面の笑みを返してくれた彼であった。小学校時代は、元気で全身に活気があふれた「やんちゃ坊主」風の潤であったが、年齢を重ねていくうちに、その笑顔や活気も成長と相俟ってかちょっとはにかむような笑顔に変わっていったのが、私の中での印象である。笑顔と一緒に返してくれた返事の方もどこか照れたような感じだったのを記憶している。

潤とは、小学校、中学校、高校と12年間同じ学び舎で過ごしきた。同じ学び舎で学んだ仲なので、学校生活の中で数多くの思い出がある。

小学校の頃は、真っ黒に日焼けしたのが特徴で、親分とまでも行かないが、リーダー的な存在で、人の面倒見も良く、皆から慕われていた。大人になってからの潤とはちょっと違って、活発でどちらかというと落ち着きがなく、いつもふざけて周りを楽しませていたような記憶がある。勉学の方はというと勤勉で常に成績はトップ集団に位置していた。そんな彼も、中学校、高校と成長していく中で、年相応の落ち着きも出てきて、風格が備わってきたような感じであった。

小学校から彼と私の共通点は、「野球」であった。我々の中で切っては切れないものは「野球」で、また、私たちの人生の中で素通りできない「野球」が最大の繋がりであったのは間違いない。

身体がある程度大きくなった高学年のころ、4～5年生あたりからだったと記憶しているが、その頃に潤との野球で強烈なインパクトを受けたのを今でも覚えている。球が滅茶苦茶速く、身体が小さい子とかは潤の送球を受けるのを怖がっていたと思う。我々同世代の連中も怖がって、一緒にキャッチボールをすることを遠慮する子もいた。球速が本当に速く、上級の学校へ行って野球をするのであれば、必ず『ピッチャー』をするのだろうなぁと、その頃子供ながらに思ったことを懐かしく思う。

中学校に入学後、本格的に野球に取り組むことになり野球に対して劇的に変化していった。幾分、他の生徒より身体が大きかったおかげで、我々は1年生から上級生との練習に加えていただき、試合にもメンバーに選出してもらった。この頃は、上級生とも年齢的には一つか二つしか変わらないのだが、身体的には上級生とは雲泥の差で、球速が速かった潤だったが、上級生には通じず、なかなか成績に結び付かなかった。年を重ね、2年生、3年生と進級すると勝ちも多くなり、市内では有名なピッチャーに育っていった。3年生の頃には、市内では正直『敵なし』と言っても過言ではないくらい、大ピッチャーとなっていた。1年生のころからバッテリーを組んでいた私は、潤の成長を間近で見て、肌で感じてきた訳だが、本当に心強く、彼の球を受けるのが楽しくて仕様がなかった。

それ以降、高校に入学してからは皆さんもご存じのような活躍ぶりで、【真の大エース】として成長していったのである。

いまだに信じられない。どこかで、あの愛嬌のある笑顔をまた見られるのではないかと思っている自分がいる。高校卒業してから、特にお互い家庭を持ってから、ましてや活動の場を東京（潤）と石川（私）とで離れていることもあって、そう頻繁に会うこともなくなり、語り合うことがなかなか実現できなかったのが心残りである。人生、思う存分生きてきた潤には、後悔なんてなかったのだろうと思うが、やはり残念でならない。これから仕事も一段落ついて、時間が出来たころに昔の仲間と昔話で盛り上がりたかった。

「潤！」　お疲れさん！　天国でも好きな野球に勤しんでくれ。恐らく、ピッチャーとして活躍すると思うが、また、そちらで球を受けるので、その時はよろしく！

「真の大エース、『潤』　永遠に!!」

小松高校と六大学野球

大井　温登（高71回）

東京大学3年の大井温登と申します。この度は小松高校同窓会報「天守台」の執筆の機会をいただき、誠に光栄でございます。先日亡くなられた元雄さんは、皆様がご存じのように六大学野球の審判員をお務めになり、神宮のグラウンド上で元雄さんに挨拶することを密かな目標にしていたのですが、叶わずじまいになり非常に残念でなりません。ご冥福をお祈りします。

自分が小松高校に入学した理由は、小松高校が文武両道を実践し、かつ甲子園を目指せる数少ない高校の一つであったからです。高校時代は吉田卓也先生の指導のもと、4強まで進出したのですが星稜などの強豪私立に阻まれ、甲子園出場はなりませんでした。その後、先輩の高鍬尚也さんや池田哲朗さんが六大学野球の舞台で活躍する姿に憧れ、日本最高峰の文武両道を続けるために東京大学を志望しました。一年の浪人の末、東京大学に合格し、野球部に入部しました。大学の勉強は難しく、時間のやりくりが大変ですが非常に実りある毎日を過ごしております。野球部では、まずは先輩方のプレーに驚き、さらに他大学のレベルの高さに度肝を抜かれましたが、昨年の春季リーグ戦で法政大学に勝利したときは非常に感動しました。

現在、自分はリーグ戦に出場させていただき、初ヒットも放ち充実したシーズンを過ごしております。しかし、チームの目標として掲げた「最下位脱出」は達成できず、悔しく感じております。来季はチームの勝利を決める一打を放てるよう練習に励んでいます。

最後になりますが、六大学野球では試合に出場すると「石川県立小松高校」とアナウンスされ、バックスクリーンにも高校名が表示されます。小松高校の名を背負い、神宮で活躍する先輩に憧れ、自分も神宮でプレーすることを目標にし、その姿を後輩に示すという良き伝統が六大学野球にあります。今年は一学年下の小川琳太郎が慶応に入部してくれました。甲子園、神宮で小松高校の活躍が続くことを願っております。

練習ハ不可能を可能にス

小川　琳太郎（高72回）

★「慶早戦で投げる。」これは私の小学生の時からの夢である。

今年の4月に2年の浪人を経て慶應義塾大学野球部へ入部し夢の実現のスタートラインに立つことができた。こうして今目標としてきた環境で野球ができているのはこれまでに素晴らしい先生方や信頼できる友人に巡り合うことができたからである。自分の夢を否定することなく応援しサポートしてくれた先生や友人にこの場をお借りして感謝の気持ちを伝えたい。

私が2年間浪人してまで慶應大学で野球することにこだわった理由は、自分の野球観や人生観を生かせるのは慶應大学野球部しかないと思ったからだ。具体的には「考えて主体的に野球をすること」と「文武両道」という部分である。

私は小学校の頃から野球選手になりたいと思うと同時に自分から野球を取った時に何が残るのかということを考えてきた。そうした中で人間性を磨き、勉学にもしっかりと取り組むことのできる環境に身をおきたいと思うようになった。高校進学の際もそうした理由から文武両道を実践する小松高校への進学を目指した。そして大学を選ぶ中でもそうした価値観を持った環境を選んだ。しかしながら志望する慶應義塾大学の壁は高く現役時代はＡＯ入試で受験したものの二次試験で不合格だった。翌年からは一般入試に切り替えたものの学力が届かず、2年目の浪人を決意し合格を勝ち取ることができた。

★私が大切にしていること。

①「凡事徹底」「愚直」

私の野球観や人生観に大きな変化があったのは中学生の時である。中学校時代の野球部の顧問の先生、チームトレーナーの方は当たり前のことをしっかりと行う「凡事徹底」を叩き込んでくれた。それまで自分中心の考え方だった私は当たり前のことでもできていないことが多く、そのことに気付くことで視野が広がり自分だけでなく周りの人に対する気配りや目配りができるようになった。チームプレーである野球をする上で大きな転機となった。また中学野球を引退した後に参加した野球チームの代表の方に「何事にも愚直に取り組む」ことの重要性を教えて頂いた。野球のみならず浪人時代にも私の心の支えとなった。

②「成功を信じ続けること」

誰かが大きな目標を掲げ努力しようとした時、不可能だ、無理だという「雑音」が聞こえてくる。そうした雑音に人は凄く敏感で知らず知らずの内に自分では無理なのではないかと自信を失ってしまう。私自身が慶應を目指そうとした時に周りの多くの人は応援してくれた。しかしながらそうした雑音は少なからずあった。目標を達成する上で成功を信じ続けることができるかが最初の障壁であると感じる。大きな夢や目標になればなるほど、その過程の中で成功を信じることができなくなり諦めてしまう。自分の成功を信じ続けることが成功の第一歩である。これは受験を終えた今実感している。

③「人を大切にすること」

受験を通じて一番実感したことは自分一人では何もできないということである。換言すれば周りの応援や支援があってはじめて色々なことに挑戦し努力できるということだ。良い時だけでなく辛い時も常に応援してくれた友人や家族、恩師の方々のお陰で最後まで諦めずに努力することができた。人との関わりを大切にして行きたいと思う。

これらの言葉を胸に私は次の目標に挑んでいる。昨年日本一に輝いた慶應野球部でレベルの高いチームメイトと切磋琢磨しながら練習に励んでいる。今の目標は「リーグ戦で戦う選ばれし者だけにしか着ることを許されない慶應のユニフォームを纏い神宮球場での慶早戦のマウンドの立つことである」

高校72回生同窓会

同窓会支援制度を活用して

水口　粋智（高72回）

令和４年１月８日、高校72回生の同窓会が開催されました。高校卒業以来初めてとなる同窓会は、すなわちおよそ２年ぶりの学年全体での再会でした。その間の生活はいかなるものだったでしょうか。大学生となり授業や部活に勤しむ者もいれば、より高みに向かって大学受験のために勉学に励んだ者もいたと思われます。それは多種多様ではありますが、しかし、どれだけ多様な生活の中でも、共通して私たちを蝕む存在がいました。新型コロナウイルスであります。まさしく高校卒業と時を同じくして深刻化

したこのウイルスは、我々の想像を遥かに凌ぐ生命力でもって今なお生活に制限をもたらし続けていることは言うまでもないことです。ですから、急速に変動する社会によって同窓会の開催すら危ぶまれた中で、それでも無事に実行へとこぎつけることが出来たのはひとえに幹事の皆さんや感染対策に留意してくださった参加者全体によるものです、本当にありがとうございました。小松高校同窓生の受験期以来の団結力を一身に浴びることが出来ました。

というわけで、１５０名以上もの同窓生が県内外から駆けつけ、盛大ながらもどこか粛々とした空気感が会場全体を包む中、代表の水口によって乾杯がおこなわれました。とはいえ、自粛ムードの中でプライベートな交流も少なかったわけですから、久方ぶりの旧友との再会は晴れやかで嬉しいものであり、すぐさま高校時代の思い出やコロナ禍における現在の生活などについて、机から別の机へとうねりのような移動を見せつつ、皆々が会話に花を咲かせていました。途中、残念ながらご時世や日程の都合上で現場にいらっしゃることはありませんでしたが、先生方がビデオ映像でもって登場し、私たちの成人を祝ってくださったときは、歓声によって先生方のメッセージが聞こえないほどの熱狂に包まれ、１月の北陸の寒さを引き裂く人熱のようなものが立ち込めました。続いて、幹事の皆さんに主体となって実行していただ

きましたビンゴ大会では、学生にとって手を出すには少々憚られる景品の数々に少年少女のように目を輝かせ、密を避けるためにクラス毎を母体として集合写真を撮る際には寝足りた朝みたいに安心しきった表情が見てとれました。そうして楽しい瞬間を過ごしておりましたところ、あっという間に閉会の時間となってしまいました。一丁締めの手から放たれる音からは興奮の冷めやらぬ様を感じ、まるで話し足りないと言わんばかりの様子でゆっくりと会場から去ろうとする参加者の姿には、それほどに小松高校での美しい記憶の数々が個々人の中に鮮烈にあったのだと改めて自覚させられました。と同時に、次回はいつ会うことが出来るのだろうかという寂しさも覚えることとなりました。この度は、コロナ禍ということもあり、残念ながら不参加を余儀なくされた方が多くいらっしゃることと思われます。新型コロナウイルスの終息した世界の中で、この度の開催よりもいっそう多くの同窓生と再会し、口をいっぱいに開いて話し合い笑い合い、顔を寄せ合って写真を撮り、あるいは先生方までもが参加なさるような同窓会が、次回に是非実現することへの期待を誓いつつ帰途についた次第です。

小松同窓会入会式、第2回小松同窓会青雲賞贈呈式 常任理事任命式

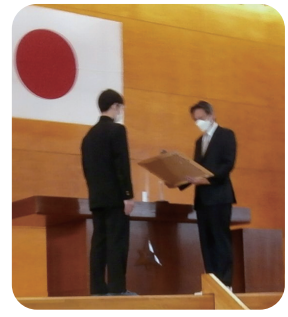
日　　時 ● 令和4年3月2日(水)　9:00～9:20
出　　席 ● 和田会長　新道副会長　山田副会長　山本副会長
表　彰　者 ● 城下凛太朗　高野岳大
74回常任理事 ● 田中大夢　北口義己

卒業式に先立ち、卒業生306名の小松同窓会入会式が行われ、第2回小松同窓会青雲賞贈呈式、常任理事任命式をしました。

小松同窓会青雲賞

●表彰対象

卒業予定者のうち、次のいずれかに該当する生徒の中から２名程度を選考。
①校是である「文武両道」を実現し、学校生活全般にわたり他の模範となった生徒
②部や生徒会の発展に顕著な成果を挙げ、学校の活性化に多大な貢献をした生徒
③ボランティアなどの社会活動で顕著な活動実績を残した生徒
④その他、特筆すべき成果を挙げ、表彰に値すると認められる生徒



同窓会支援制度

対　　象 ● 20歳代同窓会会員
金　　額 ● 1回2万円
支援回数 ● 2回上限
報　　告 ● 支援制度報告書にて写真・内容報告いただき天守台編集委員会に報告

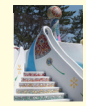
1. 設立の趣旨
若年層の同窓生の同窓会への参画意識を少しでも高めるために、経済的に余裕がなく、援助を必要とすると思われる、20歳代の学年別同窓会開催時について小松同窓会から支援をする。

2. 制度の概要
(1) 開催補助金の支援年齢条件
卒業後、20歳代までの同期同窓会について、2回を上限として1回につき、2万円を支援する。
(2) 開催補助金支出の条件
・学年全体の同期同窓会であること
・参加予定対象者数が50名以上であること
・代表申請者が、学年常任理事であること
・「小松同窓会 回期会支援事前申請書」と事後の「小松同窓会 回期会開催報告書」を事務局に提出すること

記念館特別展

『 高聡文・本多厚二 ／ 二人展 』

高　聡　文(高33回)
本多厚二(高33回)



■会　　期：10月8日(土)～11月5日(土)
■開館時間：10時～15時
■会　　場：記念館
■休 館 日：月曜日［10月10日(祝)は開館］
■テープカット：10月8日(土) 11時～

令和3年度 全国大会出場

第49回
全国高等学校選抜卓球大会
出 場
吉田 太一 君
ベスト16

日時　令和4年3月18日～21日
場所　日環アリーナ(栃木県宇都宮市)

進路指導課より

「昨年度の入試の振り返り」と「本校の進路指導方針」

２０２２(令和４)年度、２回目の大学入学共通テストが行われました。共通テストでは、これまでの知識・技能重視のテストから、思考力重視のテストへと変わりました。昨年度は入試初年度ということもあってか、正答しやすい問題も多く、センター試験とほぼ変わらない平均点でした。今年度は、より思考力を問う問題となり、読解量・情報量がさらに多くなり、偶然の正解がしにくい解答形式となって、昨年度に比べ平均点が大幅にダウンしました。共通テスト後の各大学の個別試験においては、既卒生の減少に加え、新型コロナ感染症の影響もあり、国公立大学では志願者数が減少しました。一方、私立大学では志願者数が増加に転じましたが、合格者数の増加により競争率は緩和しました。

本校でも、大学入学共通テストの大幅な難化の影響を受け、大学入学共通テストにおいて目標とする点数に届かず、全体として、前年に比べ、平均点を大きく下げることになりましたが、個別試験に向けた生徒の取り組みには、志望校合格へのひたむきさが感じられ、厳しい判定から合格を勝ち取った生徒も多くいました。

22年度入試結果ですが、東京大学3名、京都大学1名、東京工業大学1名、一橋大学2名を含む難関10大学に56名が合格、国公立大学には２０９名が合格しました。また、私立大学は、早稲田大学2名、慶應義塾大学7名、東京理科大学4名など、延べ５４１名が合格しました。前段で述べたように、私立大学では近年の志願者数の減少傾向から微増に転じましたが、合格者数の増加により競争率が低下し、私立大学に易化の傾向が見られます。本校で国公立大学志願者の割合が非常に高いのは例年通りです。本校の校是である「文武両道」「自主自律」を体現し、最後の最後まで努力し続けた生徒で、栄冠を勝ち取った生徒も数多く見受けられました。年度が変わり、志望校実現に向け、始業前や放課後にも時間を惜しんで学習に励む3年生の姿が見られます。「現役で最高の志望実現率」を図るのは勿論ですが、第一志望を貫く強靭な精神力を備えた生徒の育成にも努めていきます。

本校の学習・進路指導の方針は「自ら考え求める学習」と「自ら切り拓く進路」を柱に、次の大学や社会においても学び続け、更なる飛躍を成し遂げる人間力を育成するものです。

今後も全教職員一丸となって、全力で生徒の進路実現を支援していきます。

最近３か年の大学合格者数（浪人生を含む）

大学名	R4	R3	R2
北海道大学	12	8	6
東北大学	8	6	8
東京大学	3	3	3
東京工業大学	1	3	0
一橋大学	2	0	1
名古屋大学	8	4	4
京都大学	1	3	4
大阪大学	11	14	16
神戸大学	6	5	12
九州大学	4	3	2
10大学合計	56	49	56
国立大学医学科	5	7	7
筑波大学	0	5	0
千葉大学	2	3	1
東京外国語大学	3	1	0
お茶の水女子大学	0	0	0

大学名	R4	R3	R2
横浜国立大学	0	1	1
新潟大学	3	11	11
富山大学	23	26	26
金沢大学	56	54	64
福井大学	4	8	6
信州大学	3	3	6
静岡大学	0	0	1
名古屋工業大学	2	2	2
奈良女子大学	3	1	0
岡山大学	2	1	1
広島大学	1	3	5
大阪公立大学	3	1	3
石川県立大学	1	4	2
その他国公立大学	63	52	40
国公立大学合計	209	229	225

大学名	R4	R3	R2
青山学院大学	4	4	1
慶応義塾大学	7	4	2
上智大学	4	2	4
中央大学	5	5	1
東京理科大学	4	5	14
法政大学	13	9	3
明治大学	14	7	8
立教大学	3	5	3
早稲田大学	2	4	5
同志社大学	23	43	37
立命館大学	71	56	61
関西大学	21	24	17
関西学院大学	10	19	13
その他私立大学	360	422	332
私立大学合計	541	609	501

編集室だより

「今天守台63号はカヌーの古谷さん、野球の(故)元雄さん、大井さん、小川さんのスポーツ特集号です。私も母校甲子園初出場の球場に駆けつけ、エース元雄さんの対高知商での熱投を目の当りにし、大学時代には神宮球場に何度も足を運び六大学野球を応援観戦した思い出が蘇ります。元雄さんのご冥福をお祈り致します。

また各回常任理事の皆様のご尽力で、本当に多くの天守台ご購読申し込みを頂き誠に有難うございました。今後ともより一層天守台へのご支援ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます」

［同窓会本部］TEL：0761-21-6330　メール：tensyudai@gmail.com

「天守台」編集委員会
委員長　東　次郎（高22回）
副委員長　山口　和博（高34回）
委員　野田　洋子（高12回）
前口百合子（高12回）
宮浦　誠治（高33回）
細川　千鶴（高35回）
学校職員　沖野　信一（教頭）
松田　知隆（高30回）